# 古仏の道の現成は山河大地の姿なり

同道

平成27年5月1日
第41号
発行　梅花流師範・詠範の会
会長本間雅憲
題字　初代会長・故加藤信三師
編集者（広報部）亀谷隆道

梅花流師範・詠範の会事務局
大仙市協和　太寧寺　伊藤道人
電話（0188-96-2029）

## 峨山韶碩禅師大遠忌正当にあたって

秋田県梅花流師範・詠範の会　会長　本間雅憲

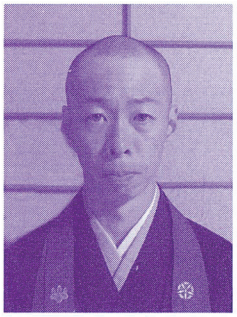
新たな年を迎え、皆様のご健勝とご多幸をお祈りいたします。

今年初のお唱えはいつでしたか。まさかまだ法具を解いてないなどということはないでしょうね。目標・課題を決めて、明るく、楽しく、張り切って詠道に励みましょう。

昨年から、大本山總持寺二祖峨山韶碩禅師大遠忌予修法要が全国各地で厳修されています。皆様には、全国大会・秋田県奉詠大会で「大本山總持寺二祖峨山禅師讃仰御和讃」「大本山總持寺二祖峨山禅師讃仰御詠歌」（永光）をお唱えいただきました。梅花新聞『香里』をお読みになった方はご存知と思いますが、この二曲の歌詞が一部変更になりました。「鶴見ヶ丘」から「諸嶽の山」となり、同じ文字数ですのでそのまま符にのせていただけばと思います。今年は大遠忌正当の年です。峨山禅師様に感謝の誠を奉げ、心を込めてお唱えしていきたいものでございます。

今年の秋田県奉詠大会は、五年に一度の全県大会にあたっています。秋田市文化会館を会場として、七月二十六日（日）に開催の予定です。すばらしい大会になるよう準備を進めておりますので、ぜひ多くの皆様のご参加をお願いいたします。

# 新任梅花主事ごあいさつ



曹洞宗秋田県宗務所　梅花主事
由利本荘市　四十八番　萬福寺　住職
鷹　照　賢　裕

今年は早くから雪が降り、また雪の多い冬になると思いきや、県中央は雪が少ない冬となり、逆に県北は過去最高の積雪量を記録したり、昨今の異常気象が異常でなく毎年のことのように天気に翻弄される年が続いております。皆様におかれましては大変ご苦労なさっていることと思います。

改めまして、二十六年十二月に新しく梅花主事に任命されました三教区萬福寺鷹照賢裕と申します。梅花主事に任命される前は人権擁護推進主事を務めさせていただいておりました。以前も書きましたが、私が梅花に関わるようになったのは長谷寺浅田老師の助言により本庁の養成所に運良く行くことになってからでした。その時の北野主任講師から梅花は講員さん檀家さんのためのものだ、私たちはその手助けをしなくてはいけないんだと聞かされました。今、自分が檀家さんの前でお唱えして講員さんに教えていると、そのことをよく思い出します。当時から思えばまさか梅花主事になるとは夢にも思いませんでした。

梅花流が始まってから月日が流れ、現在は以前のように講員さんがどんどん増えるということがない時代になってきました。

しかし梅花流にはまだまだパワーがあると思います。檀家さんの前でお唱えしていると間違いなく感じます。一人でも多くの講員さんが増えるように県内檀信徒の方々の為に、梅花に関わる宗侶の為に働かせていただきたいと思います。

今年の梅花流全国大会は神奈川県横浜市のパシフィコ横浜国立大ホールにて行われます。大本山總持寺二祖峨山韶碩禅師六五〇大遠忌正当の年でございまして奉賛奉詠を行う予定です。何度も参加している方も初めての方も是非ふるってご参加いただけますようお願い申し上げます。

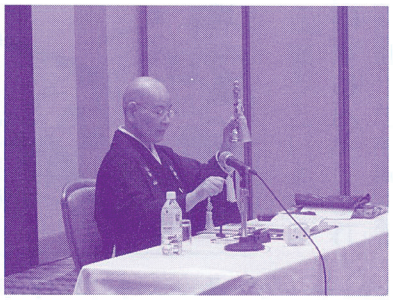
最後になりますが、秋田でも梅花流師範養成所が発足して四年が経ちます。二十七年四月より第三期がスタートすることとなっております。

初級・上級の他に新たに研修コースを増設していよいよ形が整ってまいりました。この流れを乱さぬように四年間皆様のご指導を賜り努めて参りたいと思いますのでよろしくお願い申し上げます。

# おらたちもやってます

## 宗侶、寺族梅花流詠讃歌一泊研修会開催

年明けの一月下旬、まだまだ雪、これから雪、のっちり雪、がっつり雪という雪国としては除雪三昧の時季、県内の宗侶寺族が集まって、梅花を学ぶ研修会を開催しました。講師は今年で二回目の来県となる新潟の須戸秀圓師範先生。特派師範を長きに渉って務められた一級師範で専門委員。全国大会ではよく活発明朗としてご指導をされる尼僧先生です。



さてこの度の受講者は師範二十二名余りから寺族十一名、そして養成所にて始めたばかりの数名を含む九名、計四十二名ほどの参集を得て行われました。

最初の全体講習の曲は今年の大遠忌に当たる「二祖峨山禅師讃仰御和讃」。須戸先生の微に入り細にわたる御指導、笑顔でお話ししながら厳しく指摘。分科会（師範、詠範）に移っては、「歓喜」「道心利行御和讃」。

最終講習では「聖号、同交、同行御和讃」と二日間にわたっての講習会でありました。なお、他分科会講師として柴田弘一師範先生、佐藤俊晃師範先生、浅田高明師範先生にも御指導をいただきました。

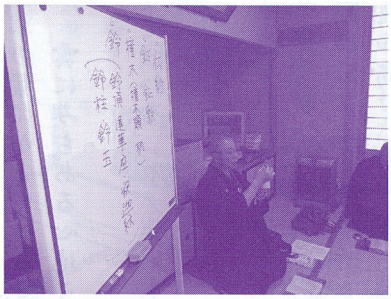
このように我々師範詠範も皆様にお教えする前に「学び修めて伝える梅花の心」を日々研鑽させて頂いております。

まだまだ同行同修の修行中でありますが今年も宜しくお願い申し上げます。

## 秋田県梅花流指導者養成所（第三期）始まる

まだ風は冬の寒さを残す春晴天の四月九日、秋田県宗務所禅センターにおいて、梅花流指導者養成所の開所式が行われた。

今年の入所者は十三名。僧侶十名、寺族三名。年齢も、大学本山修行終わっての二十代の若手から四十代の中堅まで様々。初級コースとしたの研修で、まずは浅田特派師範の説明を聞いて、慣れない手つきで法具をひもといておりました。



初日としては、姿勢、合掌、念、礼、拝から、三宝御和讃、聖号に至るまで。身体と耳からの懇意なる講習。今年初めて参加の奥山さんは「いっぱいいっぱいですが楽しいです」と笑顔で話してくれました。他、上級コース、研修コースの皆さんも、基本確認からイロ、ツヤ、特別所作に至るまでみっちりと。

養成所は今年で三年目を迎えます。去年入所した人は、今年上級コースに進み、三年前に入所した人たちは今年研修コースに進み十二人が学んでいます。その三年間の間に検定を受けて昇段。三年目ともなればいよいよ自信を持って自分のお寺や隣寺の梅花講に教える人も増えてきております。

それこそが秋田県内（特に県南、無縁の地に）に梅花を広め、尚且つお寺の弟子達に伝えて行く大きなうねりとなっていくのです。

各寺院の梅花講員、檀信徒の皆様も今しばらく期待してお待ちください。養成所を終えたぱりぱりの若手僧侶が、皆さんの地に降り立つまで。

梅花のふるさと

# 最後の教え

## 最晩年の道元禅師－二

～詠讃歌の生まれた風景（その十九　高祖承陽大師道元禅師入寂御和讃）～

### 高祖承陽大師道元禅師入寂御和讃

帰命頂礼承陽尊
建長五年の秋なかば
御年五十四歳にて
入寂（かくれ）たまいし悲しさよ

堀口義一作詞

### ◇永平寺二代を懐奘（えじょう）へゆずる◇

七月十四日、道元禅師は弟子の懐奘に永平寺の一切の仏事を行わせました。そして次のように語りました。

**我がいのち久しかるべからず。汝我より久しくして決定わが道を弘道すべし。**

私の命はもう長くない、あなたは私よりも長生きをして私の教えを弘めなさい、と言うのです。この時、懐奘が住職のあかしに法堂で上堂されたのを、道元禅師は病室にあって乗り物でその説法を聞き、証明されました。

次いで同じ月の二十八日。再び道元禅師の病床に訪れた義介に、こう言われました。

**先日はもうこれまでと思ったが、どうにか今日まで生きながらえた。じつは檀越の波多野氏より何度も京へ上ることを勧められている。もしこれで最期だとしても治療のために京へ行こうと思う。ついては来る八月五日に出発しようと思うが、お前は着いてきたいと言うだろうけど、この寺の留守を預けられるのはお前しかいない。だからどうか寺に留まってくれないか。もしまた生きて帰ることができたなら、今度は必ず今まで誰にも秘密にしていた教えをお前に授けるから。**

そしてこのことは誰にも言わないように、と添えました。義介は泣きながらその言葉に応え、永平寺に留まることにしたのです。

### ◇永平寺二代を懐奘へゆずる◇

上洛時の道元禅師の偈頌があります。

**十年喫飯す永平寺、十箇月来、病床に臥せり、**
**藥を人間にたずねてしばらく嶠を出づ、**
**如来、手を授けて医王にまみえしむ。**

治療のために京へ行くのもお釈迦様の思し召し、と詠まれているようにも思えます。

さて永平寺を出発した翌日の八月六日、道元禅師ご一行は脇本の旅宿まで来ておりましたが、義介はここまで見送りに随行していました。ここで本当のお別れとなるのでした。この場面を伝える絵図には、駕籠に乗り京へ向かう禅師一行と、あふれる涙を衣の袖で抑えながらそれを見送る義介の姿が描かれています。

この時、禅師は次の歌を詠まれました。

**草の葉にかどでせる身の木部山**
**雲にみちある心地こそすれ**

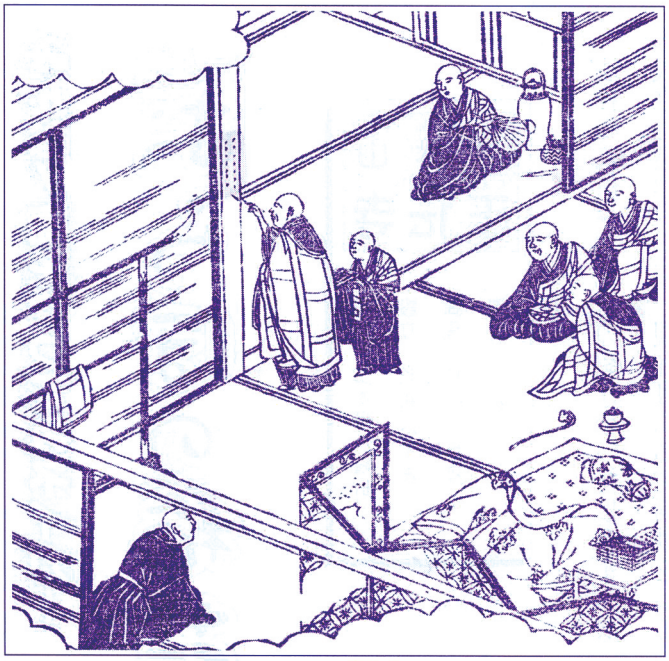
今に伝わる「木ノ芽（木部）峠の別れ」というお話しの場面です。

## ◇いずこにあっても仏法を行ずるところこそ◇

京へ着いた道元禅師は在家の信者である覚念のお屋敷で療養します。時あたかも中秋の名月となる八月十五日のことです。これまでもこよなく月を愛してこられた禅師は、これが今生最期の機会となるであろう観月に、次の歌を詠まれています。

**また見んと思ひし時の秋だにも**
**こよいの月に寝られやはする**

昨年の秋、もうこれで見納めと思った中秋の名月に、思いもよらず今年も出逢えた。しかしこれで本当の最期となるだろう。そう思うといよいよ名残り惜しく思えて、今宵の明月にはとても睡られそうにない、という思いでしょう。



病重く成り行くある日、禅師はふと次の経文を誦まれたのでした。

**もしくは園の中においても、もしくは林の中においても、もしくは樹下においても、もしくは僧坊においても、もしくは白衣の舎においても、もしくは殿堂にありても、もしくは山・谷・曠野においても、この中に皆なまさに塔を起てて供養すべし。ゆえはいかん。まさに知るべし、この処はすなわちこれ道場にして、諸仏はここにおいて阿耨多羅三藐三菩提を得、法輪を転じ、諸仏はここにおいて、般涅槃すればなり。**

これは『法華経』の一節です。たとえどのような場所であっても、そこで真の修行を行ずれば、そこそこが仏の道場となるという意味合いです。

かつて禅師は山奥の永平寺こそが修行にふさわしい場所だと主張されていました。都や時の権勢に近づくことは仏道修行にふさわしくないと言われていました。その姿勢に変化はないと思うものの、この経文の言葉からはやや違う面をうかがうことが出来るように思います。「真実の修行が出来るなら、いずこにあってもそこが仏の道場」。治療のために永平寺を去ることを余儀なくされた禅師は、京都・在俗信者の家であってもなお真実の仏法修行の成就を求めていたように思われます。伝承では図のように、柱に経文を書き付けたとされています。

八月二十八日の早朝、禅師はまわりの者を頼んで沐浴し、法衣を召し変え、正身の坐禅の姿勢を整えました。弟子たちは「禅師様、最期の時でございます、どうぞ遺偈を」と涙ながらにお願いしました。

禅師は次のようにしたためました。

**五十四年、第一天を照らす、**
**箇の跡跳を打し、大千を触破す。咦。**
**渾身もとむる処なく、活きながら黄泉に陥つ**

そして筆を落とし、息を引き取ったのです。

檀越・波多野義重は、天を仰ぎ地に伏してその早世を悲しみ、覚念ほか弟子たちの悲嘆の声が続き、懐奘はあまりの悲しみにしばらくの間意識を失ったのでした。

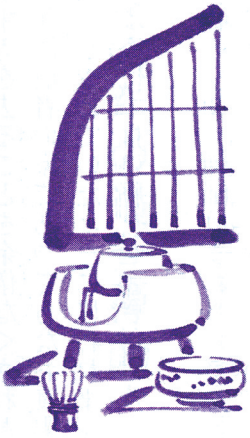
禅師のなきがらは京都で荼毘にふされ、御遺骨の姿で永平寺にお帰りになり、九月十二日に、永平寺方丈において、如法の葬儀が執り行われたと伝えられています。

# みんな！梅花やってみネイガー おらほの梅花講

**法林山（ほうりんさん） 正伝寺（しょうでんじ）**

住所　山本郡八峰町
設立　昭和六十年
講長　村松　良周
講員　八名

法林山正伝寺梅花講の紹介をいたします。講の成立は昭和六十年、現在は八名で活動をしております。梅花講創設以前は金剛講として活動しておりましたが、そのまま梅花講に移行して活動しております。金剛講、当時は二十名以上の講員さんがおりましたが、講員さんの代替わりとともに人数も減少し、現在は少数精鋭となってしまいました。少数ではありますが、住職にとりましては大変心強い方々であります。特に、涅槃会などの法要にご加担いただいたり、お盆正月、またお彼岸などの先立ちをしていただいたり、お寺の行事には率先して参加くださるとても有り難い方々でございます。



現在は月二回の練習会を住職指導で行っており、また奉詠大会や講習会等にも積極的に参加しております。練習時間は楽しく和気藹々と、お茶の時間はさらに楽しく……猛吹雪の中、雪まみれになって練習会に来られる姿にも、農繁期に遅くまで田畑に出ていて、爪や服が泥だらけのまま撞木を振る様子にも仏様の姿を見ずにはいられずにおります。私自身、このお姿を目指し、また、この場所を大切にしていきたいと思います。

## 速報

今年度より二級教範の受検が東京宗務庁だけではなくて、地方の宗務所主催の検定で受けられる事となった。つまり飛行機や新幹線で東京に一泊泊まりのドキドキ受験生旅行をしなくても良いということです。

秋田県内の地元で慣れ親しんだ師範先生に検定して頂ける。それこそ平常心でのぞめることでしょう。

講員の皆さんの更なる挑戦をお待ちしております。

# 知らせ

## 「大本山總持寺二祖峨山禪師讃仰御和讃」並びに「大本山總持寺二祖峨山禪師讃仰御詠歌」（永光）歌詞一部変更となる

既に講習会や梅花新聞「香里」等の告知にてご承知のことと思いますが右記の二曲の歌詞が変更となりました。

諸師範先生のご説明及び「香里」の記事によりますと、変更の歌詞は「鶴見が丘」の一節を「諸嶽の山（しょがくのやま）」にするということでありました。

これは、大本山總持寺が能登の地より横浜鶴見の丘にご移転し、百年余り経ち関東の港に開かれた禅苑として発展興隆しましたが、もともとは能登半島の門前町に今もある總持寺（祖院）で、ご開山瑩山禅師の霊廟（お墓）もあり、山号は「諸嶽山（しょがくさん）」であることから、今年の峨山禅師六百五十回大遠忌に合わせて、急遽歌詞変更となりました。

## 能登の総持寺の開創について

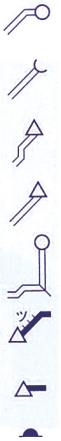
瑩山禅師様は正和二年（一三一三）に永光寺をお開きになった後、能登に曹洞禅を広める為に活動していた。その頃、能登の鳳至郡櫛比荘（現在の輪島市門前町）に諸岳寺（もろおかじ）という、行基が開いた真言宗の寺院があり定賢律師という僧侶が住職を務めていた。

この定賢律師が元亨元年（一三二一）の四月十八日の晩、眠りについてしばらくすると観音様が夢枕に現れて「永光寺に瑩山という優れた禅僧がいるからこの寺を譲るように」というお告げを受けたという。

また、不思議なことにその五日後、永光寺にいた瑩山禅師様が四月二十三日の早朝、夢を見た、それは「櫛比荘にある諸嶽寺に入り仏法を広めて頂きたい」という不思議な霊夢であった。あたかも観音様のお導きのように結ばれた因縁は、その年の五月に招聘入山し、諸嶽山総持寺として新たに開創となる。ゆえに諸嶽山という山号は総持寺と諸岳寺の縁起がかかわる重要な名称ですので、改訂に至ったのでありましょう。

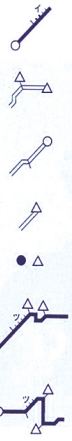
〈香里、峨山禅師物語より抜粋、参照〉

「大本山總持寺二祖峨山禅師讃仰御和讃」
変更部分



（三）しょがくのやまの

「大本山總持寺二祖峨山禅師讃仰御詠歌」（永光）
変更部分



しょがくのやま

# 告知

## テレホン梅花

☎〇一八一八七三一七六七六（ハナミ ナムナム）

（毎週土曜日にテープが代わります。）

**三月**
七日　總持二祖（和）
十四日　永光（總）
二十一日　香華
二十八日　お授戒（和）

**四月**
四日　正行（和）
八日　妙鐘
十一日　道環
十八日　無常（和）
二十五日　月影

**五月**
二日　花祭り（和）
九日　花供養（和）
十六日　供華
二十三日　歓喜（一）
三十日　慶祝（和）

**六月**
六日　新亡精霊（和）
十三日　地蔵（和）
二十日　慈念
二十七日　道心利行（和）

**七月**
四日　報恩供養（和）
十一日　澄心
十八日　同行（和）
二十九日　報謝（和）

※ご意見、ご要望等をお気軽にお寄せ下さい。

〒〇一〇-〇一一一
秋田市金足岩瀬字前山三
東泉寺（〇一八-八七三-二六七五）

# 梅花行持ご案内

## ■禅センター梅花講習

【檀信徒講習会】〈午前十時半～午後三時〉

五月一日（金）二祖讃仰御和讃
永光
六月五日（金）慶祝御和讃
梅花
七月三日（金）同行御和讃
同交
九月四日（金）道心利行御和讃
紫雲

※課題曲を確認してお気軽にご参加ください。
初心者、上級者の二会場にて。
受講は無料です。

## 梅花流秋田県六十周年記念奉詠大会

◆日　時　七月二十六日（日）
◆会　場　秋田市文化会館

今年は秋田県に梅花流が創立して六十周年となります。この度はそれを記念しての奉賛大会を秋田市の文化会館において、全県一堂に会して開催致します。ただいま、日時以外は企画調整相談準備中です。

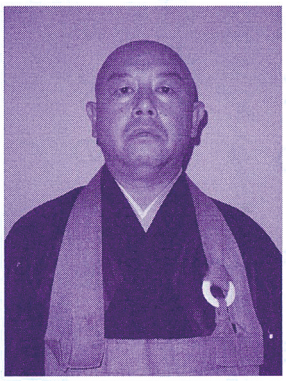
十年ひと昔を振り返り、旧友と巡り会えるかもしれません。ともにこの同じ時代に、佛の教えに出会い、梅花の道を進む、同行同修の多くの皆様のご参加をお待ちしております。

※詳細は後日。

# ちょっとぶじょほう　～梅花つれづれ～

## 『私と梅花流詠讃歌の出会い』

第七教区　常泉寺　田口眞山



私が梅花流詠讃歌と出会ったのは、というより知ったのは十九年ほど前のことでした。現在四十九歳ですので三十歳前後の夏の時期です。遅いと思われる方もおられると思いますが、その時期に出家得度をさせて頂いて仏門の世界に入ったからです。出身は青森県の片田舎で実家の菩提寺は当時浄土宗（これも後から知りました）前職は電気工事業に従事しておりまして、お盆にお墓参りに行く程度の人間が何を思ったか、なぜか仏門に……。

修行に行くまでの間、数ヶ月お寺で着物、衣の着方、お袈裟の掛けた坐禅の仕方等を習いながら準備をしておりました。その時週に二回ほど檀家さんのおばあさんたち（いや失礼お姉さま方）が集まりチンリンリンと何かやっているではありませんか。聞きますとこれは梅花流詠讃歌という宗教歌、通称御詠歌又は梅花というもので、とてもいいものだよと教えていただきました。それが梅花流詠讃歌との出会いでした。

その後大本山永平寺東京別院に修行に入り講義で梅花を教えていただきましたが、当時から音が迷子になり先生には大変ご迷惑をおかけしたと思います。（現在もあまり変わらないような気が）修行を終えて師寮寺で数年つとめた後、秋田に縁を結ばせていただき、又、一緒に梅花をやらないかと誘っていただき、さらに師範養成所にも入所させていただいた事は私にとってとても幸運な事だと思っております。おかげさまで秋田県内の御寺院様寺族様との出会い、師範養成所での全国各地の仲間が出来ました。

私にとって梅花流詠讃歌との出会いは人との出会いであると思います。